

令和8年度入学 社会福祉学部 編入学（一般）試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
総合問題	1	齋藤 純一	思考のフロンティア 公共性	2000年 pp.8-13 より 一部改変	岩波書店
	2	FELIX P. BIESTEK, S.J.	THE CASEWORK RELATIONSHIP	1957 pp.134-135 より	Loyola University Press
	3	尾崎 新	「ゆらぐ」ことのできる力—ゆらぎ と社会福祉実践	1999年 pp.6-11 より 一部改変	誠信書房

令和8年度 編入学（一般）

社会福祉学部

総合問題 (120分)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は、8ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
3. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
5. 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
8. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

1 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 70 点)

公共性は閉じられていないということを語るだけならば、それは、公共性の言説空間を現に規定している権力関係から私たちの眼を逸らさせることになる。公共的空間は開かれているにもかかわらず、そこにはつねに排除と周辺化の力もはたらいている。何が公共性にアクセスする途を封じ、それを非対称的なものにしていくかは、できるだけ冷静に認識しておく必要がある。

(中 略)

とくに注目したいのは、「言説の資源」(discursive resources)という眼に見えない資源が公共性へのアクセスをいかに非対称的なものにしていくかという点である。所得や資産などのマテリアルな資源が重要でないわけではない。たとえば、人前にでるのに恥ずかしい思いをしないですむもの(衣服や靴)を身につけることはつとにアダム・スミスが強調した人間にとっての基本的必要である。そうした経済的格差がまた、教育を受ける機会の格差、情報の収集・分析・発信の能力の格差などに如実に反映されることはあらためていうまでもない。

(中 略)

「言説の資源」は、公共性への実質的なアクセスを根本から左右する。というのも、公共性におけるコミュニケーションは、ほかでもなく言葉というメディアを用いておこなわれるからである。そこでは、「言説の資源」に恵まれた者たちが「[A]」(文化的・政治的に他者を指導する力)を握る。

(1) この資源は量的な多寡ではなく質的な優劣によって測られる。たとえば、かりに同じ内容が語られるとしても、その発話が明瞭であるかどうか、要を得ているかどうかの違いは、コミュニケーションの行方に大きな影響を及ぼす。文化の支配的なコードをすでにわがものとしているかどうか、「言説の資源」の優劣を規定するわけである。そうした文化的コードは言説にとって外在的なものではなく、まさに言説の実践を通じて構成されるものであり、公共性は、このコードからは自由ではありえない(かりに貨幣や権力から自由でありえたとしても)。

言説の資源は、第一に、人びとがどのような語彙をもっているかにかかわる。自らの問題関心を説明し、他者を説得しうる理由を挙げるためには、当面のコンテキストに相応しい(とされている)言葉のある程度自由に使用できることが必要である。もし、問題を論じるための適切な語彙に乏しいとすれば、そうした言説は周辺に追いやられることになる。言説の資源の格差は、日常知の間の非対称性だけでなく、専門知と日常知との非対称性という形をとることもある。たとえば、金融・医療・先端科学技術などをめぐる争点について、公共的空間の論争を実質的にバイパスする仕方意思決定がおこなわれる傾向が(2)顕著になってきている。そうした言説の資源の格差にもとづく支配(technocracy)を批判的に制御するためには、専門家に説明責任を課し、日常言語への(3)翻訳を求めるだけでなく、専門知をもって専門知を批判しうる対抗的な言説をその外部にもつことも必要である。

第二に、見過ごされやすい問題だが、言葉をどのように語るかという言説のトーン(語り方・書き方)は、重要な資源の一つである。「合理的」とされている語り方は、感情の抑制、明瞭な発話、話の(4)簡潔さなどを暗黙のうちに求めている。逆に、「黄色い」声、「うざったい」語り口などが、

その内容が問われる以前に、公共の言説の空間から遠ざけられることは決して稀ではない。とりわけ身体性が前面にでる語り方が排除されるという傾向は、現在の文化的コードがどのように編成されているかを暗示している。

第三に、本書の関心にとって最も重要なのは、公私の区別をわきまえ、公共の場に相応しいテーマを語らなければならないという暗黙の規範的要求の問題である。言説の資源は、その意味で、場に相応しい主題を選択できるかどうかという能力にもかかわっている。「個人的なもの」を差し控えることのできない言説は排除の対象となる。

この問題が重要なのは、「公共的なもの」は、何を「個人的なもの」「私的なもの」として定義するかによって^(a)反照的に定義されるからである。公共的領域と私的領域の境界は固定したものではなく、何をもって「私的」とするかという言説によって書き換えられる。近代の「公共性」の定義にとって決定的な意味をもったのは、宗教や信仰をめぐる事柄を「私事化する」(privatize) ことによって、それらを公共的な争点から除き去ることであった。身体とりわけ性的な事柄も、一方では「生命-権力」の標的とされつつも、不可視のパーソナルな次元に位置づけられてきた。近代の「公共性」は、多くのテーマを「私的なもの」とすることによって自らを定義してきたのである。このことは、逆にいえば、公私を分ける境界線は言説に依存する流動的なものであり、言説以前のもの、政治以前のものではないということの意味している。

「個人的なことは政治的である」(The personal is political) という一時期のフェミニストの標語は、従来の公私の境界設定を問題化しようとする意図を端的に表している。それは、性別役割分業を正当化する言説によって公共性から排除されてきた家事労働やケア・ワークなどを政治的な争点としてとらえ返そうとする対抗的な言説の好例である。ドメスティック・ヴァイオレンスやセクシュアル・ハラスメントなどに見られるように、この間、私的な「不運」(misfortune)、個人的に解決すべき(堪え忍ぶべき)問題として語られてきた多くの事柄が公共的な「不正義」(injustice) としてとらえ返されるようになってきた。また、家族の手によってなされるべき「私事」として語られてきた介護についても、まがりなりにも公的な制度がもうけられるようになった。公私の境界の変化をもたらすのは、境界を超えて語る言説の実践の累積的な効果である。

こうした経験は、公共性をめぐる理論にも影響を与えてきた。たとえば、ユルゲン・ハーバーマスは、ある時期まで、普遍化可能な規範的言説とその可能性を見込めない価値評価的言説とを^(b)峻別し、後者を公共の討議から排除するという立場をとってきた。しかし、近著『事実性と妥当』(1992)では、公共の討議はあらゆるテーマに開かれたものとして位置づけられている。意思形成の空間はあらゆる問題提起に開かれていなければならないという要求と、社会全体を拘束する集合的な意思決定は特定の価値に依拠すべきではないという要求とは矛盾しない。公共的空間は、公私の境界をめぐる言説の政治がおこなわれる場所であり公共的なテーマについての言論のみがおこなわれるべき場所ではない。^(c)何が公共的なテーマかはコミュニケーションに先行して決定されているわけではないのである。

(齋藤純一『思考のフロンティア 公共性』, 岩波書店, 2000年, pp.8-13より, 一部改変)

問1 下線部(ア)～(オ)の漢字の読み仮名を書きなさい。

問2 空欄Aに入るもっとも適当な語句を、次の選択肢から1つ選んで記入しなさい。

デモクラシー	ヘゲモニー	イデオロギー
--------	-------	--------

問3 下線部(1)「この資源は量的な多寡ではなく質的な優劣によって測られる」とはどのような意味か、本文中に示されている3つのポイントを、それぞれ10字以上20字以内で抜き出しなさい。

問4 下線部(2)「何が公共的なテーマかはコミュニケーションに先行して決定されているわけではない」のはどのような理由か、本文の内容に即して120字以上140字以内で説明しなさい。

2 次の英文を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 60 点)

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません。

(FELIX P. BIESTEK, S.J., *"THE CASEWORK RELATIONSHIP"*, Loyola University Press, 1957, pp.134-135 より)

注 social casework ソーシャルケースワーク vivify/vivifies 生命をあたえる
attune 調和させる poignancy 痛切な
intake インテーク面接/受理面接：相談者が相談機関に来談した際などに行う最初の面接

問1 下線部(1)を日本語に訳しなさい。

問2 下線部(2)の he が指示する語句を、文中から抜き出し、英語で書きなさい。

問3 文中の空欄 [ア] に入る適切な語を以下から1つ選び、英語で書きなさい。

and, so, because, however, if

問4 文中に記されている「人間に共通する基本的ニーズ」を日本語で書きなさい。

問5 文中の空欄 [イ] に入る最も適切な語を以下から1つ選び、英語で書きなさい。

follow, following, follower, followed, follows

問6 以下に与えられた語句を並べ替えて、空欄 [ウ] に入る適切な英語表現を書きなさい。

basic/ the client/ rights and needs / a danger/ senses/ to/ these

3 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 70 点)

筆者が本書を通して考えてみたいこと、それは「ゆらぎ」についてである。また、⁽¹⁾キミヨウに聞こえるかもしれないが、「ゆらぎ」のもつ力、「ゆらぎ」に直面する力についてである。援助者としてつねに明確な助言を提供する力でも、迷いを通過せずに判断を下す能力でもなく、迷い、動揺し、わからなさや無力さに直面する力についてである。

「ゆらぎ」を社会福祉実践の研究課題とすることに違和感をもつ人がいることは当然予想できる。また、社会福祉実践の本質を「ゆらぎ」であるとする意見に抵抗を感じる人が少なくないことも想像できる。

(中 略)

しかし、⁽¹⁾社会福祉実践の本質は「ゆらぎ」との直面である。なぜなら、人が「いかに生きるか」「どのように自己実現を目指すか」に関して、「つねに正しい画一的な答え」は存在しないからである。クライエントが自ら問題を⁽²⁾コクフクする方法、方向もつねに同じではない。「正しい」と考えた方向に自己実現を目指しても、挫折を味わうことがある。⁽³⁾グウゼンの出来事によって、生活が思わぬ方向に一変することもある。また、障害をどのように受け入れたらよいかに明瞭な答えはないし、重要な他者を喪失した悲しみをいかに乗り越えるかに明快な答えは存在しない。人は生き方を⁽⁴⁾モサクし、葛藤とともに人生を歩む。そのような生活・人生に関わる社会福祉実践もまた、つねに正しい答えをあらかじめ用意することはできない。そのとき、その時代の社会が人びとに要請する生き方もつねに同じではない。さまざまな挫折や葛藤、社会の矛盾や変動と関わるなかで、援助者も迷い、悩み、葛藤する。これが社会福祉実践の本質である。社会福祉は実践のなかで経験するこれらの「ゆらぎ」を出発点にしてこそ、私たちの生活・人生のもつ現実や本質を初めて明瞭な姿で捉えることができる。また、さまざまな「ゆらぎ」とていねいに向きあうことによつて、生活・人生を構造化している社会の仕組みを描き出すことができる。

(中 略)

おそらく、「ゆらぎ」の意義と力に初めて注目した⁽⁵⁾リンショウ研究家はフロイト(Freud.G.)であろう。彼は、人が親しい他者や重要な他者を病気などで失った悲しみを癒やす概念として、「悲哀の仕事」(mourning work)を提唱した。

フロイトは、人が親しい他者を失った事実を知覚的に認知することと情緒的に断念することは決して同じではないと述べている。特に、失った対象が大切な存在であればあるほど、あるいはその相手に依存していればいるほど、人は喪失にともなう情緒的苦痛に耐えることができない。したがって、失った事実を呑み込めず、現実を否認する。それでも駄目とわかると、自分を見捨てた対象を恨んだり、責めたりもする。人はこのような苦痛、悲しみ、恨み、無力感を味わうなかで、さまざまな不健康な心的防衛を用いることになりやすい。すなわち、「喪失の否認」「悲しみの抑圧」「対象の置き換え」「対象と関わってきた自分の否定」などである。しかし、人はこのような防衛に頼るかぎり、外界への関心を失い、現実から⁽⁶⁾乖離し、新しい愛の対象を選ぶことができない。現実から目を背け、非現実にしがみつき、未来へのつながりを断つことになる。

⁽²⁾フロイトは、悲しみを癒やすプロセスのなかで重要なことは、「悲しみを悲しむこと」であると指摘す

る。悲しみを無理に和らげるのでも、悲しみをほかの感情に置き換えるのでもなく、悲しみを十分に悲しむことが癒やしを近づける力になると述べている。言い換えれば、「悲しみを悲しまないこと」「耐えてしまうこと」は一見健康で立派な振る舞いに見えるが、それは不健康な心的防衛の表われである。また逆に、「過度に悲しみすぎることも不健康な心の状態の表われである。したがって、^⑧人は悲しみを前にして「悲しみを悲しむこと」のできる力を身につける必要がある。人は「悲しみを悲しむこと」によって、初めて悲しみという現実をさまざまな角度から考え、悲しみを抱きながらも、新たな現実を生きることができる。小此木は、フロイトの「悲哀の仕事」を解説するなかで、「悲しむこと」のできる力についてこう述べている。「失った対象に対する思慕の情は永久に残り、対象と二度と会うことのできない苦痛は依然として残るであろう。しかし、それをどうすることもできないのが人間の限界であり、人間の現実である。大切なことは、その悲しみや思慕の情を、自然な心によって、いつも体験し、悲しむことのできる能力を身につけることである」。

それでは、悲しみに直面する人を援助するとき、私たちは何をすべきなのだろうか。それは「悲しみを和らげる手伝いをすること」でも、「悲しみを忘れさせること」でもない。援助の中核は、「悲しんでよいのです」と伝え、悲しむことができる環境を整え、悲しみの表現に耳を傾け、受けとめることである。あるいは、過度の悲しみ過ぎに対して、いたずらに混乱にいたらぬよう、適切な枠組みを提供することである。フロイトは「悲しみを悲しむこと」は生きる力であり、健康さの重要な側面であると論じている。悲しみだけに限らず、さまざまな葛藤、動揺、迷いなどと直面し、それらを受けとめる力、それが本書が論じようとする「ゆらぐ」ことのできる力である。

(尾崎新『「ゆらぐ」ことのできる力——ゆらぎと社会福祉実践』、誠信書房、1999年、pp.6-11より、一部改変)

問1 下線部(ア)～(オ)のカタカナを漢字にしない。

問2 下線部(1)「社会福祉実践の本質は『ゆらぎ』との直面である」と著者は論じているが、「本質」と「直面」はどのような意図で用いられているか。次の例文の と それぞれに当てはまるもっとも適切な語句を、後の選択肢の中からそれぞれ1つ選びなさい。

(例文) 社会福祉実践の (本質) は、「ゆらぎ」 (直面) である。

の選択肢

正しい解釈 共感される理論 共通する認識 本来あるべき姿

の選択肢

を断つこと に反発できること と向き合えること を引き付けること

問3 下線部(2)「フロイトは、悲しみを癒やすプロセスのなかで重要なことは、『悲しみを悲しむこと』であると指摘する」ことを取り上げているが、「悲しみを悲しむこと」が「悲しみを癒す」理由はどのようなものか。本文の内容に即して170字以上200字以内で説明しなさい。

問4 下線部(3)「人は悲しみを前にして『悲しみを悲しむこと』のできる力を身につける必要がある」とあるが、著者はどのような援助のあり方を論じているか。端的に示している箇所を本文中から90字以上110字以内で抜き出しなさい。